でいる。

塩狩峠のふもと、旭川近くの和寒出身。地区人口がわずか三十人という場所で育った。だから、いまだに利尻島が僻地だと思えないし、地域医療に抵抗もない。むしろ、自分を生かせる場所だと感じている。ひとつの地域で赤ちゃんが成人になるまでを医療者として見届ける——そんな仕事を手がけるのも将来いいかなと、いま須貝は思い始めている。

須貝と同期の外科医、鈴木茂貴(二九歳)は外科医としての修行の真っ最中だ。手術ともなれば、セッティングから患者・家族への説明など、すべてをひとりでこなさなければならない。緊張する瞬間だ。話し方のテクニックなども先輩医師を見て勉強中だという。

利尻島へ来て最初の手術は大腸の部分切除だった。高齢だったため、予後が心配だったが、なんとか乗りきることができた。「無事、退院されたときは肩の荷がおりた気がしました。嬉しかったですね」。できるだけ経験を積んで、一日も早く自信の持てる外科医になれることを目指している。

利尻島出身で、二十三年間利尻島国保中央病院に勤め、病院のこれまでをじっと見てきた婦長の堀田るり子(四二歳)も、二年交代制はそう悪くないと思っている。「最初は院長が自分と同じ年齢だったのが、振り向いたらいまはすべて自分より年下」という状況にも慣れてきた。医師が前向きな分、看護婦にいい刺激になっている。なにより、自分たち看護婦のことばに耳を傾けてくれる同僚であることが堀田は嬉しい。仕事もやりやすい。そうした医師たちと、厳しいがプロ意識を常にくすぐられるいまの職場が気に入っている。生涯、仕事を続けるつもりだ。自分の親たちも含め、島のお年寄り全員を看取る覚悟もできている。

西野はかつて、大西にこう言った。

「医療を野球にたとえるなら、『誠意』と『信頼』のキャッチボールといえる。医師は自分のために仕事をする。すると患者さんが喜んでくれる。それではもっと喜んでもらいたい、とさらなる努力をする。そこに基本があるように思う」

常に患者サイドに立った医療の実践と、人は代わっても、同レベルの医療を提供できるシステム。利尻島国保中央病院がめざすのは、地域住民にとって垣根の低い、身近な「かかりつけ医」としての病院だ。

かつて、自治医科大学の救急医学の教授をして「利尻はこれでも僻地なのか」と言わしめた同病院。僻地にあって高度な医療を範疇に取りこむ一方で、年々進む過疎化のなかで医療レベルをどこに合わせていくか、また、介護保険とのからみで介護の問題とどう取り組んでいくか等、今後の課題はある。とはいえ、すでに、この地になくてはならない存在となっていることだけは、ゆるぎない現実だ。